

生徒の自主性、自発性を伸長させる運動部活動指導の研究 - 自己指導能力を育む運動部活動指導を行い進路実現へ導く -

篠崎信彦 (長崎大学教職大学院)・桑野友裕 (福岡県立スポーツ科学情報センター)
小原達朗 (長崎大学名誉教授)

Study on the Coaching in Club Activities for Developing Students' Autonomy and Initiative. -Lead Students to the Future through the Instruction For Self-guidance in the Club Activities.-

Nobuhiko Shinozaki, Tomohiro Kuwano, Taturō Obara

キーワード：自己指導能力，目標設定カード，コーチング指導，ラグビーフットボールレ
フリーの観点，積極的生徒指導，進路実現

I. はじめに

近年、顧問による暴力・暴言、勝利至上主義などのインテグリティ、バーンアウト(燃え尽き)症候群、など、部活動の問題があげられる。これらの問題が解決されぬまま、部活動指導が教員の超過勤務となっていることを解決するために、外部指導員への移行、地域へ移行する方針が進んでいる。部活動は子ども達のために行われるべきにもかかわらず、指導者中心の部活動になっているというのが現状である。学習指導要領高等学校解説総則編には、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動について、①スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養、互いに協力し合っ
て友情を深めるといった好ましい人間関係の形成等に資するものであるとの意義があること、②部活動は、教育課程において学習したことなども踏まえ、自らの適性や興味・関心等をより深く追求していく機会であることから、第2章以下に示す各教科等の目標及び内容との関連にも配慮しつつ、生徒自身が教育課程において学習する内容について改めてその大切さを認識するよう促すなど、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること、③一定規模の地域単位で運営を支える体制を構築していくことが長期的には不可欠であることから、設置者等と連携しながら、学校や地域の実態に応じ、教師の勤務負担軽減の観点も考慮しつつ、部活動指導員等のスポーツや文化及び科学等にわたる指導者や地域の人々の協力、体育館や公民館などの社会教育施設や地域のスポーツクラブといった社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うこと」とされている。2014年に“生徒指導の内容を踏まえた運動部活動指導の研究—自己指導能力を育む運動部活動指導—”について、実践研究を行っており、目標設定カードとコーチングによる指導を実施し、子ども達の変容を調査した。この実践研究を基礎として、子ども達
が中心となる部活動作り、進路実現につながる部活動作りを行うことを目的として、本主

題を設定した。

II. 本研究の目的

生徒の自主性、自発性を伸長するために、顧問という立場から、どのような指導を行えば、自己決定の場を持たせ、自己存在感を高め、共感的人間関係を育み、生徒達の自己指導能力を育成し、生徒中心の部活動を作ることができるかを考える。また、顧問という立場で積極的な生徒指導を行うことで、進路実現につなげることを目的とする。

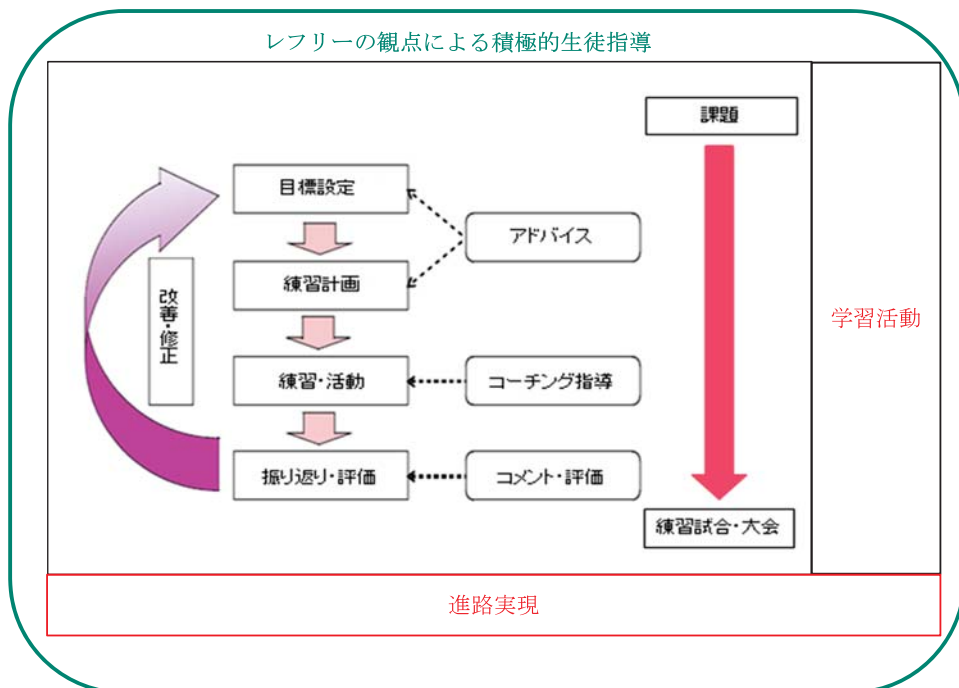


図1 本研究における生徒指導図

III. 方法

本実践においては、高校男子ラグビーフットボール部を対象とし、目標設定カードやコーチング指導、ラグビーフットボールのレフリーの観点による積極的指導を実施することで、自己指導能力を育成し、生徒達中心の部活動作りを行い、生徒の進路実現をさせる(図1)。

自己指導能力育成のために、“自己決定の場を与える”、“自己存在感を持たせる”、“共感的人間関係を育てる”の3機能を中心にラグビーフットボール部の指導を行う。

1. 先行研究

(1) 主体的問題解決能力テスト

実態把握を行う上で、客観的に把握し検討するために田川(2013)が作成した運動部活動における主体的問題解決能力テストを使用した。アンケート項目は、西嶋(2000)の体

目標設定カード	
年 氏名 _____ NO. (/ ~ /)	
1-1 目標	(_____ 大会までの目標) ・基礎体力面
	・技術面 大会もしくはある期間における基礎体力面と技術面の自己目標
1-2 目標設定の理由	なぜ、このような目標を設定しようと思ったのか、理由
2-1 今週の課題	目標を達成するために解決するべきと思う課題
2-2 課題設定の理由	課題を設定した理由
2-3 達成するために工夫すること	練習法や課題を解決するために行う工夫
今週の課題に対する取り組みの自己評価(三件法)	
3-1 今週の課題は、(達成できた ・ おおむね達成できた ・ できなかった)	
3-2 【良かった点、うまくいった点】 自己の練習への取り組みの振り返り、良かった点やうまくいった点をまとめる	
3-3 【課題を達成するためのポイント】 振り返りから考えられる、課題解決策のまとめ	
3-4 今週の部活動で感じたこと 思ったこと	実践活動期間について、以下の点を中心に振り返り、まとめる ・トレーニングメニューや指導者に関すること ・チームでの取り組み・自己の取り組みに関すること
3-5 次週に向けて(次に取り組むこと)	目標達成に向けた課題解決の状況把握と新たな課題への取り組みなど見通すこと
3-6 顧問・コーチから	取り組みを振り返り、コメントを記入する

図2 目標設定カード

育における主体的問題解決能力テストをもとに作成されたもので、内容としては「内発的意欲」、「主体的行動」、「達成満足」、「自己認識」の項目が盛り込まれている。

(2) 目標設定カードを使った指導実践

本研究において作成した目標設定カード(田川2013)は、11の項目により構成されており、これらの項目について、記入上の留意点やねらいは、図2の通りである。

(3) コーチング理論に基づいた指導実践

日本コーチ協会(Japan Coach Association:以下JCA)では、「コーチングは、クライアントの生活と仕事における可能性を最大限に発揮することを目指し、創造的で刺激的なプロセスを通じ、クライアントに行動を起こさせるクライアントとの提携関係を目指す」と定義され、スポーツの現場では、クライアントを選手とし、「選手の可能性を引き出し、目標に向かって行動を起こさせること」(JCA)となる。文部科学省(2013)は、コーチング指導は「競技者とその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境において日常的にスポーツに親しむことをサポートすること」、「競技者やチームを育成し、目標達成のために最大限のサポートをする」こととしている。運動部活動のコーチとしては「その活動が学校教育の一環として行われるものであることを認識した上で、しっかりとした管理運営体制を学校全体で構築し、生徒の多様なキャリアや志向などを念頭に教育課程との関係を工夫したり、目先の競技成績にとらわれず、生徒の長期的なスポーツキャリア全体を視野に入れたコーチングを行ったりすること」(文部科学省2013)とされている。また、暴力からの断絶を絶対条件として、「やる気を引き出し、自ら考えてプレーすることの大切さを教え、その長いスポーツキャリア全体を視野に入れてコーチングを行うことができるよう、コーチング体制の整備とコーチングの資質能力の向上に取り組む必要がある」(文部科学省2013)としている。

また、神谷(2008)はコーチングによって、「子どもに居場所を与え、「認められることで他者を受容することができる」としている。このことから、本研究におけるコーチング指導は生徒の自己存在感、共感的人間関係を育成できるものと考えられる(図3)。

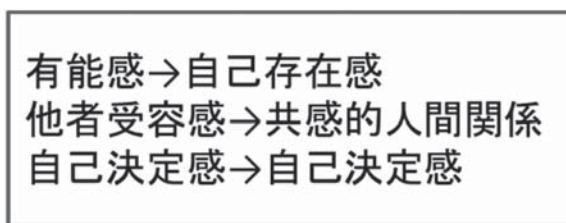


図3

①実態把握

弱点や課題、長所について、選手自身がそのことを把握しているかを生徒たちにインタビューや目標設定カード、実態観察によって調査を行う。インタビューや目標設定カードによって生徒の特徴を理解した上で、練習の観察を行い、課題解決に向けた観察を行うこ

とで、生徒ひとり一人の個人の実態の把握を行い、練習メニューの提案などの参考とした。

②情報の共有

生徒が目標を設定し、目標達成に向けた課題を解決するためには、生徒自身の力だけでは十分でないことがあるために、指導者からの助言を行うことも必要である。しかし、過度な助言を行うと生徒の主体性を損なうために、生徒自らが気付くような指導を行った。さらに、チームだけでなく、個人とのルールの共有を行い、責任感や使命感といったものを持たせるようにした。さらに、部活動の生徒の様子を他の教員にも伝える。

③実際の指導

“認める”、“ほめる”指導を行っていく上で、最大限に活用したのが、目標設定カードであった。目標設定カードの中で、“認める”と“ほめる”の指導を行ってだけでなく、生徒自身が課題に向けた取り組みの何を頑張った、努力したかということが明確となり、生徒の頑張りや努力をピンポイントで“認める”、“ほめる”ことができた。仮に、課題の取り組みの結果が成功しなかったとしても、活動そのものを“認め”たり、“ほめ”たりすることで意欲の継続となるように心がけた。また、試合や練習中の声掛けもネガティブなものからポジティブなものに意識を変えさせたり、少しでも生徒を“認める”、“ほめる”場の設定するために、ルールのクイズや、基礎体力テストの測定会、チームの中でのお手本、役割を与えたりといったことを行った。

“しかる”指導では、突き放すのではなく、受容するように行い、遅刻といった失敗に対して、生徒の意見を必ず聞き、生徒の話す時間を必ず確保することに留意した。“しかる”内容の中で、問題となる行動以外は言わないことや、生徒がチームにとって重要な存在であることを前提として“しかる”ように心がけた。

(4) 生徒の変容

自らを客観的に見て課題を発見し、課題解決に向けて自らで考えて活動すること、また目標、課題を目標設定カードに記入することで、言語化され、振り返ることが可能となったこと、カードを見ることで生徒の実態把握の質が高まること、さらに実態把握をもとに、コーチング理論に基づいた認める目標に向かう指導を行えるようになった。目標設定カードによって、課題に気付き、設定していくことで“自己決定の場を与える”、こととなり、コーチング指導によって、“自己存在感を持たせる”、“共感的人間関係を育てる”を行うことができた。

その他に以下のような変容が見られた。

- ・練習中の声の変化：ネガティブなものからポジティブなものへと変わった。
- ・練習中のプレーエラーの減少：練習時間を小まめに切ることで、集中力が継続され減少が見られた。
- ・自主練習を行う生徒の増加：課題が明確となったことで、増加が見られた。また、課題解決に向けて、練習メニューの紹介の依頼や、直接指導を依頼されることが増えた。
- ・目標設定カードの記述の変化：繰り返し目標設定カードを使った指導と、コーチング理論に基づいた指導を行うことで、課題に対する意識が変わり具体性が高まった。

(5) 成果

- ① コーチングによる指導は生徒に活躍の場を与え、部活動場面以外では、活躍の場がなかった生徒に対し、プラスに影響することが見られた。
- ② 生徒を褒めるというコーチング指導は、指導者と生徒の間だけではなく、生徒と生徒の間でも行われるようになり、部活動の雰囲気作りには良い影響があった。
- ③ また、目標設定カードによる課題把握は、生徒が課題を主体的に検討することだけでなく、課題を自らが考えることにより、解決に向けて自主練習に取り組んだり、課題を継続して行い、それらを言語として置き換え、保存していくことで技能が伸びたりと、部活動が活性化された。
- ④ 目標設定カードをもとにし、練習の観察を行うことで、質の高い実態把握を行うことができ、それをもとに個人のニーズにあった練習の提案や助言を行うことができた。

(6) 課題

- ① 今回の実践は部活動の顧問教員の勤務時間の増加を引き起こし兼ねないものとなっている。毎日ではないが、目標設定カードへのコメント記入というものは、時間を要するものとなる。回数を重ねるごとに、少しずつ教員の負担を減らせるような実践にしていく必要があると感じた。
- ② 外部指導者と管理顧問の2人体制で指導を行う場合に、技術指導を行う外部指導者と、部活動の運営や生活指導を行う管理顧問の役割分担を明確にし、指導方針に一貫性を持たせなければならない。

2. レフリーの観点による積極的指導

(1) ラグビーフットボールのレフリーの役割

ラグビーフットボール（以下、ラグビー）のレフリーは他のスポーツとは異なる役割がある。それは反則をさせないように声をかけるという点である。ラグビーの競技規則には、規則の説明だけでなく、ラグビー憲章が書かれている。ラグビー憲章には、“ゲームをプレーすることとその補助的支援とは別に、ラグビーには、勇気、忠誠心、スポーツマンシップ、規律、そして、チームワークといった多くの社会的・情緒的概念が包含されている。この憲章は、競技の方法と行動の評価を可能にするチェックリストを示すためにある。その目的は、ラグビーがそのユニークな特徴をフィールドの内外で維持できるようにすることにある。この憲章は、ラグビーというスポーツをプレーし、指導し、競技規則を作り、適用する際の基本原則を網羅している。この憲章は、競技規則とともに欠かすことのできない重要なものであり、すべてのレベルでプレーする人たちのための基準を示すものである。”とされている。また、“ラグビーをあまり知らない人が少し見ただけでは一見矛盾の固まりのように思われるこの競技の背景に、ラグビーというゲームを支配する原則を見出すことは難しい。例えば、ボールを獲得しようとして相手に強烈な身体的圧力をかけていると見られることにはまったく問題はないが、それは故意に、あるいは悪意を持って怪我を引き起こそうとする行為ではないのである。これらはプレーヤーとレフリーがその範囲内で行動しなければならない境界であり、行動規範は、自制と規律を融合させ、個人で

も集団でも、明確に細かく線引きする能力に依存しているのである。”とされている。ゲームの中で、レフリーとして、良いプレーと悪いプレーを明確に線引きしなければならない。そして、線引きしたプレーに選手を従わせるのではなく、選手に理解をしてもらう必要がある。さらに“プレーヤーには、競技規則を遵守し、フェアプレーの原則を尊重するという最優先の責務がある。ゲームがプレーの原則に従ってプレーされるよう、競技規則は、そのように適用されなければならないものである。マッチオフィシャルは、公平性、一貫性、細やかな感性、そして、必要に応じて管理能力をもって、これらを実現させていくことができる。それに対し、コーチ、キャプテン、プレーヤーは、マッチオフィシャルの権限を尊重する責任がある。”とあるように、マッチオフィシャル=レフリーはゲームを管理することが求められる。レフリーが反則を取り締まるという概念ではなく、プレイヤーを導くことつまり、積極的生徒指導と同じ概念を持っていることになる。

ラグビーのレフリーは試合を管理するという観点から、反則が起こったら、すぐに判定結果をプレイヤーに示すことが求められる。あるプレーに対して、そのプレーの終局を見据え、『ゲームが良い方向に進んだ』と考えた場合は、反則を採用しないという判断をする。これはアドバンテージという概念であり、反則を犯した側よりも反則を受けた側に利益があれば、それらの反則は反則として取り扱われないのである。しかし、相手を傷つけるような危険なプレーに関しては、その場で判断をすることが多い。もし、その場で判断をせずに、ゲーム中には取り扱われなかったとしても、ゲームが終わった後に、危険なプレーには報告があり、罰を受けることになる。

生徒と接する場合も、生徒の誤った行動を時には、長い目で見て、好転しないかを継続的に見守る場合や、誰かを傷つけるような行動に関してはすぐに指導を行うと行った概念を持っている。特に、見守るという点では、誤った事象が起こった時に指導をする消極的指導とは異なり、見守ることで再度誤った行動をしそうになった場合は、声かけ指導などができると積極的指導と同様と捉えることができる。

(2) 国際大会で感じたこと

ラグビーのレフリーを約10年経験する中で、海外でのレフリー経験の機会をいただいた。そこで強く感じたことは、競技規則の理解と私たちレフリーのジェスチャーである。反則が起こった際に、『この反則の反則たる所以は』を十分に理解していないと、現象だけで判断してしまう。選手の気持ち、反則に至るまでの経緯、そして、ゲームが好転しないかを判断するためには、競技規則を十分に理解しておく必要性があった。また、競技規則に掲載されるジェスチャーというものは、全世界共通であり、ジェスチャー無しで判定をするとプレイヤーや監督、観客は反則名がわからずに、同じ反則を繰り返す傾向にある。これではレフリーは試合を管理することができない。特に、言語によるコミュニケーションが十分にできなかったために、これらの2つを特に感じた。

ブラック校則といった表現をされるように、高校生を指導する際に、「規則だから従いなさい」といった指導は不十分な指導につながってしまう。校則=規則の背景を十分に理解し、誤った行動前後の気持ち、生徒の誤った行動だけではなく、誤った行動に至るまでの経緯、そして終局を見定めることが重要になる。

(3) 対象

県立高校ラグビー部員 平成27年4月～令和元年10月 62名

(4) 指導内容

- ① 目標設定カードと、日々の練習、また担任といった他の職員による生徒の分析を行い、生徒が判断を誤りそうな場面を予測し、間違いを回避する方法や間違えることで自らが困ることになってしまうことを事前に説明をする。また、スモールステップで目標設定をすることで、自らの課題を明確にさせる。また、部活動以外の記述を促し、学習面の目標なども設定させ、生徒の学習意識と進路意識を高めるようにした。
- ② コーチング理論に基づき指導を実施する。練習内容は選択制にし、年のスケジュール、学期のスケジュール、月のスケジュール、週のスケジュールを提示し、必要なことを生徒達に考えさせる。スケジュール変更が起こった場合は、変更の背景を説明し、生徒に指導者の考えを共有させる。また、出来る限り学校行事のスケジュールを一緒に提示することで、学校生活への関連を高めさせる。部活動、学校行事における役割を積極的に務めることへの声かけ、進路研究（オープンキャンパスや学校見学会）などへの積極的参加を促した。

指導者の負担を減らすために、異年齢集団の性質を生かし、目標設定に対して、上級生がフィードバックをする期間を設けた。指導者の負担を減らすだけでなく、上級生という役割を全うするために、上級生自らが練習に励み、下級生を指導した。

- ③ レフリーの観点による積極的指導では、生徒たちの学校生活、他の教員・保護者からの連絡、特に生徒達の性格や特徴を十分に把握し、積極的に指導を行った。学校のスケジュールと部活動のスケジュールを同時に出すということにして、①大会と考査が重なってしまうこと、②直前に焦ることが無いように、重なる数週間前に休みを多く作っているのはなぜかということ、③試験教科の教員へ大会と考査が重なり、直前ではなく事前の休みを取っているために、試験が苦手な生徒へ声かけをして欲しいこと、④声をかけても教員の所に行けない生徒へは、指導者（顧問）として連れて行くこと、といった順でいくつかのステップ（手立て）を作り、指導した。当然、生徒たちには少しでもステップが上がるように、促した。その他にも、学習環境を整えるために、土日の練習の後、教室を借りることや、試験科目の教員にお願いをして学習会を開くなどを行なった。

遅刻や忘れ物、怠惰な生徒に関しても、5分前行動の徹底や生活リズムそのものの見直し、必要な物のリストを作成し、視覚的な認識を強めさせた。怠惰になりがちな生徒にも怠惰な行動の結果を指導するのではなく、過程を観察する、時には怠惰な行動をすぐには指導せずに、過程の一部とし、次の誤った行動の直前に指導するようにした。また、部活動を無断で休むや寝坊でそのまま休むなどの誤った行動をした際は、必ず次の日に説明に来ること、謝罪は指導者ではなく、チームにするという規則を作り、チーム全体の規範意識を高めた。

人間関係のトラブルや、他人を傷つける行為に関しては、練習を中断してでも指導を行い、事のよし悪しを生徒達に伝えた。もし、大事に至らない事象であったとしても、指導者としてまた一人の社会人としてのよし悪しの基準を明確に伝えることにつ

なだった。

(5) 進路実現

ラグビー部所属生徒の多くが、全国大会（花園）予選まで活動するために、10月頃の引退となる。他の部活動とは異なり、受験勉強が短くなっている。他の部活動生徒に比べると、より計画的にかつ、丁寧な進路指導が求められる。下級生の目標設定カードを上級生がフィードバックすることによって、上級生が進路の助言をくれたり、上級生の目標設定カードの記述を上級生引退後に下級生が見たりすることで、その当時の努力や悩みを知ることができ、生徒自身が気づき、解決に繋げるようになった。一部の生徒は、オープンキャンパス・体験教室に行く時期などは、生徒たちで計画的できるようになった。

3. 成果

(1) 個の変容

①ケース1（部活動重視で学習が疎かになりがちな生徒）

本部活動の生徒の多くが、部活動を重視し、学習を疎かにする傾向があった。その中でも、学習が学年の平均レベルA群と、学年の最下位レベルB群と大きく2つに分かれた。どちらの生徒にも計画性の欠如が見られた。その日暮らしの生徒が多く、主にスマホの触りすぎによる、学習時間の少なさを生み出していた。積極的指導の観点から、スケジュールを明確に作り、計画的に指導すること、さらにチームメイト同士で確認して、気づきを伝え合うことで、大きな相乗効果を生み出した。特にB群に対しては、試験教科の教員へ事前に声かけを依頼することで、学習への意識を高めた。また、A群、B群ともに卒業後の進路へ十分な知識がなかったことから、進路指導課へ依頼をし、オープンキャンパスや体験教室の情報を提供し、数人のグループで参加させ、進路意識を高め、学習意識向上へつなげた。4年制大学を希望した生徒は4年制大学へ、専門学校を希望したものは専門学校へ、公務員を希望したものは、公務員へと進路実現を達成した。

②ケース2（特別指導後、部活動を始めた生徒）

生徒Kは問題行動を起こし、特別指導となった。家庭訪問を数回行う中で、生徒Kからは「打ち込めるものがない」「目標がない」といった言葉を耳にした。学校で対応を検討し、ラグビー部に入部することを勧めた。生徒Kは入部することへの関心は低いと感じていたが、家庭訪問の帰りに保護者から「自分で決め切れていないので、半ば強引で構わないので入部させて欲しい。本人はやりたい気持ちがある」と聞いた。次の家庭訪問時に、強く勧誘し、入部することを決意させた。生徒Kは元々の運動能力の高さもあり、入部して3ヶ月でレギュラーを掴みとった。レギュラーを取るという目標が、チームで勝ちたいという目標へなり、チームメイトを自主練習に誘い、チームの能力が向上した。特別指導時は、進路に関しては、目標がないと言っていたが、ラグビーを始めたことで、保護者との会話が増え、保護者の勧めもあり、4年制大学を目指すようになった。九州学生リーグに所属する大学からの声がかかるまでに成長したが、本人は学力試験にチャレンジしたいと最後まで努力をし、合格をかちとった。ラグビー部という居場所を与え、目標設定をしたことで、部活動だけではなく、進路実現につなげた。

③ケース3 (向上心が高く、積極的な生徒)

1年生時から向上心が非常に高い生徒PとOが入部してきた。先輩に対しても、良く質問をして、技能の向上を目指した。生徒Pは、運動能力があまり高くなく、生徒Oは運動能力が高く、それぞれラグビー技能の成長には差があった。生徒PとOの活躍の場を、部活動だけに止めることはもったいないと感じ、生徒PとOには学校を引っ張る存在になって欲しいと考え、学年と話し合い、生徒会と大運動会の実行委員を勧めた。生徒Pは、生徒会長を目指すようになり、生徒Oは体育祭の実行委員長を目指すようになった。それぞれ部活動の合間を縫って、目標達成に必要なことを調べていた。生徒Pは、1年時に一学年上の先輩が生徒会長に立候補した際に応援演説を行った。また、学年集会の際は、誰よりも早く集合場所へ行き、教員の代わりに整列の指示をするようになった。事前に相談があり、私が学年集会の指揮をしていたので、「やるならとことんやって欲しい」と伝え、生徒Pはそれをやりきった。生徒Oは、1年時から体育委員を務め、2年時の後期には体育委員長となった。自ら考え、自ら判断をし続けるために、役割を提供する指導を続けた。生徒Pに関しては、積極性が高すぎるあまり、様々な行事に参加し、部活動への不参加が続くことが多くなり、さらには進路について悩むことがあった。保護者から相談を受け、生徒Pに目標の再設定を勧めた。生徒Pは部活動面、生活面で小さな目標が達成できていないことが多いことに気づき、自ら目標を修正した。3年時にレギュラーとして、大会出場はかなわなかったが、1年時から目標としていた芸能の道へチャレンジするために、最後の最後まであきらめずに、進路実現をした。

生徒Oは、体育祭の実行委員長の目標を達成させただけでなく、毎回丁寧な目標設定とフィードバックに対する改善・修正を行い、活動を続けた。部活動で2年時からレギュラーとして活躍しただけではなく、学習面でも成績が上昇し、3年時には学年上位を維持する結果となった。夢の実現のため、学部が限られていたこともあり、第一志望の4年制大学と第二志望の4年制大学で迷い、結果的には第二指導の4年制大学へ進学をした。

④ケース4 (学習能力、運動能力は高い自信がない生徒)

数少ないラグビー経験者で、入学時より成績が上位であった生徒Cは、能力の高さとは反対に自己肯定感が大変低かった。目標設定カードにも細かく記入してくれたが、目標設定が生徒Cの能力の割には低い印象があった。目標設定カードのフィードバックに、高い目標設定を促しても大きな変化はなく、面談や普段の部活動指導でもそつなくこなし、指導の手応えはなかった。担任の話によると保護者からの期待が高く、生徒Cは不安な気持ちになっているとのことであった。生徒Cが最高学年になった際には、ラグビー部キャプテンへ指名した。チームメイトからの推薦もあり、人望も厚かったが生徒Cは重荷と感じ、最初はキャプテンとなることを拒んだ。生徒Cの担任と相談をして、生徒Cの保護者へキャプテンを指名したこと、チームメイトが推薦していることを話し、保護者からも説得をしてもらった。保護者は、指導者から指名されたこと、チームメイトから推薦を受けたことが嬉しかったと生徒Cに伝えたことで、生徒Cも嬉しい気持ちになり、他者(保護者)に受容された喜びから、キャプテンを引き受けてくれた。進路実現に関しては、志望校(4年制大学)を落とさず、チャレンジしたいと

いう気持ちで取り組み、浪人をする選択肢をとった。自信がなかった生徒 C が目標達成のために、浪人する選択肢をとったことで、保護者、担任は驚いたが、1年間の浪人生活の結果、志望している4年制大学に進学をした。

(2) 全体の変容

目標設定カードの役割は、目標を設定し、練習計画をし、練習へ取組、フィードバック、改善して、新たに目標を設定するだけでなく、カードを貯めていき見返すことができるといったポートフォリオの役割がとて高かった。目標設定カードを使い、1年間通して指導することで、学校行事や進路学習の状況がよくわかり、より解決能力が高まった。

また、部活動の規則を明確にしたことや、即座に指導を受けること、時間を置いて指導を受けること、指導の強弱をつけることで、生徒の多くは問題の良し悪しが明確にわかるようになった。

勝利への気持ちも指導者からの一方通行ではなく、生徒達から勝つために必要なことは何かと考えるようになり、インターネットで掲載される練習動画や他のチームが実施している練習、合同練習などで教えてもらった練習を自分たちで選択し、実施するようになった。

4. 課題

目標設定カードについては、教員だけでなく生徒の負担にもなる。目標設定カードを書くことが義務になり、とにかく埋める（記入する）という生徒も一学年に一人はいた。いかに、生徒の記入に対し、指導者がまた書きたいと思うフィードバックをするかを考え、指導者が記入すると勤務時間が超過するといった悪循環を生んだ。生徒の多くは机に座って文字を書くことが面倒くさいという傾向があるために、アプリにして、生徒の身近なツールであるスマートフォンを媒体とすることも必要であると考えた。

また、今後部活動を地域に開放していく際に、管理顧問と技術指導者の二人の指導者のどちらが目標設定カードを使うか、上記に示したように、生徒に2枚書かせることを促すのは負担が増えるだけになる。今回は、部活動のこと、生活（進路）のこと、どちらも記入していいように工夫して使用した。これは私が、管理顧問と技術指導者の二役を担うことができていたからである。生徒達の自主性・自発性を高めるためには、学校教員が部活動指導を行うという時代と逆行した形で行わなければならないために、改善が求められる。

一定の成果が見られたこととしては、部活動場面だけでなく、学校生活全体においても、レフリー一的観点による指導があげられる。しかし、教員の価値観での指導に頼る他なく、どのような問題行動に対して即座の指導を行うのか、時間を置いて指導するのかの明確な基準を作ることは難しいであろう。この課題解決のためには、問題行動に対して、即座に対応していくことを基本的な指導とし、生徒指導部や学年全体でチームとして積極的指導が可能な場合は、時間を置いた指導が可能であると考えなければならないようである。

生徒達の進路実現のためには、キャリア教育の視点を幅広く捉え実施していく必要がある。私たち教員の多くが校務分掌を持ち、生徒指導部、進路指導部、教務部などにわけられる。しかし、これらを分けて考えるのではなく、連携できる態勢を十分に整えておくこ

とが一番の課題となるだろう。

【参考文献】

- ・有村久春：新編生徒指導読本．教育開発研究所，2007
- ・井上勉（2002）中学校における「心の健康」を育む運動部活動の在り方－自尊感情を高め、自己実現を支援する運動部活動モデル－．京都市総合教育センター平成14年度研究紀要
- ・神谷和宏（2007）教師のほめ方叱り方コーチング．学陽書房
- ・西嶋尚彦：中学校体育における主体的問題解決能力育成プロセスの因果構造分析．体育学研究，2000
- ・友添秀則：体育の人間形成論．大修館書店，2009
- ・田川一弥（2013）高等学校教育課程との関連を図った運動部活動指導の在り方に関する研究－主体的問題解決能力を育む運動部活動指導－
- ・日本コーチング学会：コーチング学への招待．大修館書店，2017
- ・勝田隆：スポーツ・インテグリティの探求－スポーツの未来に向けて－．大修館書店，2018